2020／秋冬

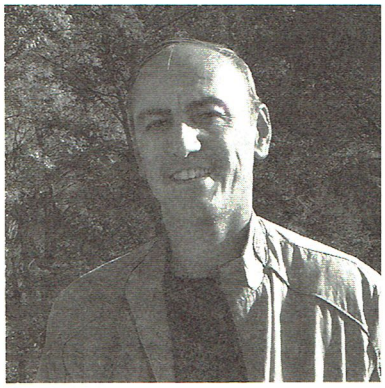
和紙だより

季刊　福井県和紙工業協同組合

■目次

和紙な人々　シュフラット・プラトフさん……1
取組紹介　紙の文化博物館特別展「大ふすま展」開催……2
レポート　「サマルカンド紙」テーマに国際セミナー開催……3
情報欄……4

―和紙な人々―



■Shukhratillo Pulatov（シュフラット・プラトフ）
1969年生まれ。1993年タシュケント州立教育大学美術教育学科卒業。照明デザイナーを経て、2007～2018年、ウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所保存修復部門に勤務、主任を経て、2018年よりウズベキスタン国立図書館保存修復部門責任者。ドイツ、イタリア、サウジアラビアなどで、イスラム美術や写本保存修復に関わる文化支援プログラムに参加。イスラム歴史文化遺産の分析・保存・修復の理論と実践の本を多く著す。

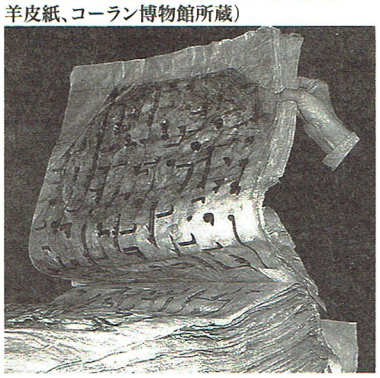
■シュフラット・プラトフさん（イスラム紙文化遺産修復家・研究者）「サマルカンド紙とは何か？」

●背景

日本で、ウズベキスタン（ウズベク）という国はあまり馴染みがないかもしれませんが、古代よりオアシス都市が栄え、シルクロードの中継地でもありました。八世紀にアラブ人によって征服され、宗教的にはイスラム化しました。何世紀もの間、数知れない侵略のあった地域ですが、この地域の文明の最も輝かしい遺産は本の文化であり、多くの写本、原稿、歴史的文書が残されています。カリグラフィー（書）やミニアチュールが描かれた本や紙の発展もイスラム教と共にあり、人々はマハラという教区でイスラムの規則や規範、歴史などを学びました。宗教に関する本だけでなく、最も栄えた十四世紀のティムール王朝時代には地理学、数学、天文学、建築、芸術、文学、音楽等の本が作られ、交易され、世界文化の発展にも大きく寄与したのです。

十九世紀のロシア帝国侵略後は、基本の文字がアラビア文字からキリル文字、ラテン文字へと大きく二回も変わっています。ソビエト時代には宗教が否定されたため、人々は受け継いできた貴重な本やコーランなどを家の壁の中やその他の場所に隠したりしました。独立後、初代大統領の命で、国際イスラムアカデミーの写本調査が始まり、人々が隠し散逸した七～二〇世紀の本を集め、購入し、適切に保存する取り組みが始まりました。本や紙文化遺産の修復・保存・研究は長年否定されてきた自分達の文化アイデンティティを取り戻す重要な作業でもあり、政府も力を入れています。

クフィ書体で書かれた世界最古のコーラン写本（カリフ・オスマン編纂）には殺害時の血のしみが残されている（646年頃、全6冊、羊皮紙、コーラン博物館所蔵）



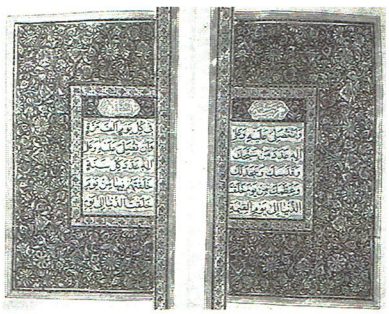
●サマルカンド紙の種類

七五一年のタラス川河畔の戦いで破れた中国人捕虜から、東洋の製紙技法が伝わりましたが、それは布由来の原料を使ったものとされています。これを機にサマルカンド周辺は羊皮紙に代わる重要な手漉き紙の産地となります。筆と墨で書くアジアの紙が、硬筆（ペン）やインクで描く西洋式の紙へと変容した東西の紙の重要な交叉点でもあります。職人たちは紙を製造するだけでなく、中国式技術を模倣したり、原料の組成を変えたり、と絶え間なく改良を加えていったようです。ですから、「サマルカンド紙とは何か？」と問う場合、厳密な定義があるわけでなく、漠然とこのあたりの地域で八世紀以降作られた紙と捉えた方が良いでしょう。

サマルカンド紙には様々な呼び名があったようですが、紙の種類の研究はロシア時代に多くなされました。グリゴリエフ、ゾトフ、セミョーノフらの調査研究を紹介しますと、まず三つの主な原料がありました。

一番目のタイプは絹を原料としたもので、繭を毛羽立てた後のクズ繊維から作られ、シルクペーパーと呼ばれました。「スルタンペーパー」「イパックペーパー」「ダブラットアバディペーパー」「コゴジィアブルシュミペーパー」と呼ばれる紙は、みな同じものを指し、絹の紙です。三つの分類中最も丈夫で長持ちする紙で、この紙で書かれた写本の中には今だに透明感を失っていない紙さえあります。スルタン・アリ・マシュハリという五十年前の紙研究の重要人物は、一番いい紙は「ダブラットアバディペーパー」で、墨でも滑らかに書け、丈夫だと言っています。

二番目は、「ニムキャノップペーパー」。「ニム」は半分、「キャノップ」は麻という意味で、半分は絹のままで、もう半分は大麻（ヘンプ）が加えられるようになりました。



祈祷書 "Dalail al-Khairat"（写本、個人所蔵）

三番目は、コットンペーパーで「コーカンド紙」と呼ばれました。百％コットンのボロを使用し、ペンで書きやすい滑らかな表面、インクを吸い過ぎない高密度な紙で、中にはインクと紙とのコントラストを和らげる少し茶色がかった紙もあり、一八～一九世紀のアラブ世界、ヨーロッパで広く使われていました。この紙は一つのブランドとなり、タシュケントで作られても、「タシュケント紙」ではなく、「コーカンド紙」と呼ばれました。

これらの分類の下位に、生産地や製紙名人の名前を付した紙の名前がありますが、「ミルイブラハムペーパー」などは、職人の名前で、彼が

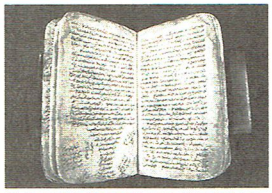
作った紙には丸い形のウォーターマークがあります。

●共同研究の意義と成果

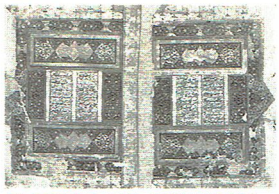
三年前から行ってきた愛知県芸大チームとの国際共同研究は、サマルカンド紙に焦点を当て、世界の紙の伝搬やその上に描かれる芸術表現、製法などを科学的分析から読み解こうとしています。まずは制作年代のはっきりしている本やミニアチュール、カリグラフィーの紙分析や制作方法を緻密に調べ、諸説あるこの地域の紙の全体像を少しずつ明らかにし、復元や保存修復に役立てることです。

このプロジェクトを媒介として、国内外の研究者が一同に集まり、一つの話題を共有し、情報を交換し、意見を引き出せたことが大きな成果です。みんながよく顔を知り、良い雰囲気の中で、今後どんな方法論で、どこに焦点を当て深掘りをしていったら良いかの方向性が出せたのも大きな収穫だと考えています。

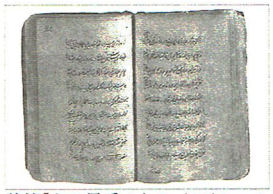
ウズベク国立図書館所蔵の貴重な写本遺産



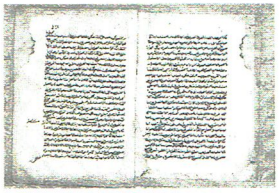
法律書「法的判断」(1195年写本)



伝承記「黄金の鎖」(1581年写本)



詩篇「心の最愛のもの」(アリシール・ナヴォイ著、1823年写本)



基礎的倫理の本「神に選ばれしもの」(1253年写本)

■紙の文化博物館特別展「大ふすま展」開催

昨年九月六日〜十一月十一日、越前市の紙の文化博物館では、襖の魅力を再発見しようと「大ふすま展」が開催された。

襖紙は、奉書紙と共に越前を代表する紙である。江戸時代、明治・大正・昭和・平成の前期頃までは、全国の襖紙の殆どは越前で生産されていたが、住宅の洋風化とともに生産は激減。しかし、当地には今も素材感を活かした無地の襖紙や、モダンなデザインの大判の一枚手漉き襖紙を注文に応じて作る職人たちがいる。

●今なぜ、襖か?

この展覧会を企画した市産業政策課の佐藤登美子さん、橋谷和成さんは、企画意図を次のように語る。

「住まいが洋風化されてしまい、和室もないような住宅が増える中で、ここ何十年も襖紙は、売れない売れないと言われ続けてきました。でも、売るために何かやってきたかと言うと、積極的には何もやっていない。こちらでは大判の一枚紙を作る漉き屋さんのことを『大紙屋さん』と言いますが、ここ二十年くらい、いろんなインテリア関係の紙や雑貨も手掛けるようになり、次第に評価されてきています。しかし彼らのアイデンティティはやはり襖紙屋さんなのです。だから、本来のもので勝負してほしいなという思いがありました。」

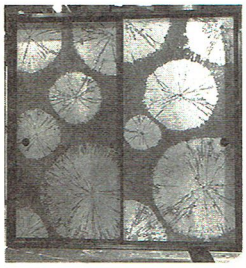
「今の若い人達は、逆に襖というものを知らないから、却ってまっさらな目で襖を見ることができるかもしれない。また、越前襖紙には最高級なものがあると言っておきながら、建築家や内装業者の方々は全然知らないということがじわじわ分かってきたのです。だったら、昔のような大きな紙-襖紙を正面切ってアピールすることができないかと考えたのです。」

●展示物の内容

展示品は地元の手漉き襖紙製造元五社でつくる「大紙会(たいしかい)」(長田製紙所、やなせ和紙、滝製紙所、岩野平三郎製紙所、五十嵐製紙)が制作。

博物館一階には、実際に開け閉めできる襖十八点。中央には五社の襖紙で囲まれたコラボ作品の畳の部屋が設えられた。襖の模様付けはいずれも印刷や絵の具ではなく、鳥子紙などの地紙に染色した繊維などを載せて、花や山並み、ポップな水玉や縞模様。揉み紙で作った絞り染模様。水の流れを巧みに活かした落水模様。白を基調色にし、凹凸のあるテクスチャーで陰影を演出したもの。見る角度によって美しい繊維の流れが見える雲肌麻紙、縞や波型のシボのある檀紙、黒銀を紙料に混ぜて渋い反射効果を狙った無地のものなどは、格調高さを感じさせる。

二階には各製紙所が今回の展示のために、意欲的に制作した襖作品十五点を展示。屏風絵のように紙料で描いた藤、蔦の絡まる木を始め、豪壮な龍、鮮やかな色調の波と富士山、ユーモラスな鯨、大きな墨流し模様など、美術作品と見紛う高度な技術の詰まった作品が集まった。これらの作品は、いずれも越前の大判の一枚紙を漉く技術、数ある模様紙の伝統技法に、それぞれの工房や職人の得意技を加味したものである。



越前和紙の伝統的得意技を下敷きにした作品

制作に参加した五十嵐製紙の五十嵐康三さんは、「今回の展示でどれだけの直接的な効果があったかは分からないが、皆さんが襖を再認識する契機にはなった」と語る。

佐藤さんは、「モノトーンやシンプルなものがオシャレだというデザイン傾向が結構続いていますが、今、山並みや松が入ったようないわゆる昭和レトロっぽい伝統柄を見ると、これが意外にいい!美術作品のレベルまでいっている襖はそれだけで上品で迫力があり、それは又、いい紙でしか表現できません。むしろモダナイズされたデザインしか似合わない都会の景色自体が、何か画一的で、日本の本当の美意識や素敵な暮らし方を失っているのでは?と思うのです」と言う。

伝統工芸士、長田榮子さんの作品「藤図」(長田製紙所)

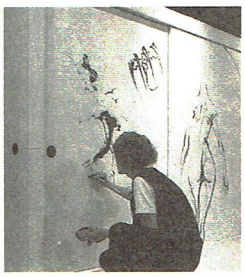
「鯨」(五十嵐製紙)

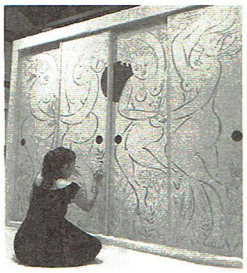
●関連イベントと新しい層へのアピール

約二ヶ月の会期中のイベントとして、九月七日には、福井が生んだ世界的な墨絵アーティスト西元祐貴さんや、十月十一日には同市在住のデザイナー・aiMIKIさんによる「ライブペインティング」、東京大学のサークル「東大襖（ふすま）クラブ」による五日間に渡る「ふすま張り替え実演とトークショー」が行われた。十月十二日に予定されていた市観光協会企画の、見事な襖の古民家などを探訪する「ふすま紙工房見学ツアー」は、残念ながら台風のため中止になったが、イベントには業界人始め多くの人が参加し、襖を知らない若い工芸好きの層にもアピールできたようだ。

襖は閉じて部屋を作ったり、開けて部屋を繋げたり、自由に間取りを作ることができる。調湿機能、有害物質を吸収してくれる自然素材。豪華な装飾アートパネルにも、自然を切り取った絵画にもなる。楚々と佇む上質な紙で作られた襖は、光を柔らかく拡散して陽の移ろいを味わう優雅な建具にもなる。襖のある暮らしが育む細やかな感性を、取り戻してみてはいかがだろう。

「東大襖（ふすま）クラブ」による「ふすま張り替え実演」




西元祐貴さん、aiMIKIさんの「ライブペインティング」

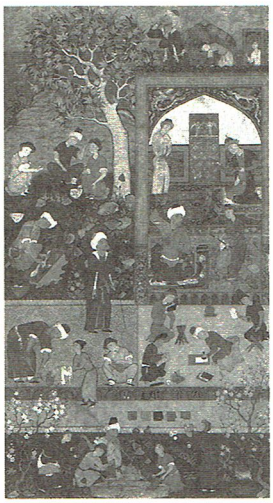
レポート

■「サマルカンド紙」テーマに国際セミナー開催

昨年十一月十六日、名古屋大学アジアコミュニティフォーラムで、愛知県立芸術大学主催、紙と芸術表現「ウズベキスタンのサマルカンド紙、イスラーム写本、ミニアチュールを知る」と題する国際セミナーが開催され、百五十名が参加した。

●サマルカンド紙復元プロジェクト

ウズベキスタン（ウズベク）のサマルカンド紙は、七五一年、タラス河畔の戦いに敗れた中国人捕虜から中国の製紙法が伝わり、この地域で紙製造が発展したとされる。この紙はイスラム教の聖典コーランやミニアチュール（細密画）に使用され、更にヨーロッパでも羊皮紙に代わる、ペンで滑らかに書ける紙として好評を博し、東西の紙文化と歴史を知る上でも重要な紙である。サマルカンドだけでなく、コーカンド、ブハラにも存在したという産地は、十九世紀には国の政変とともに工房が衰退し、製造技法が失われたため、確かな歴史や製法は明らかではない。


十六世紀の製紙工房の様子を描いたミニアチュール

総合的な和紙の授業に積極的に取り組んできた愛知県立芸術大学、柴崎幸次教授（デザイン専攻）の研究室では、四年前、ウズベク国立芸術大学と学術交流協定を締結し、サマルカンド紙の調査・復元プロジェクトを進めてきた。今回の会議は、その研究成果を総括するものである。

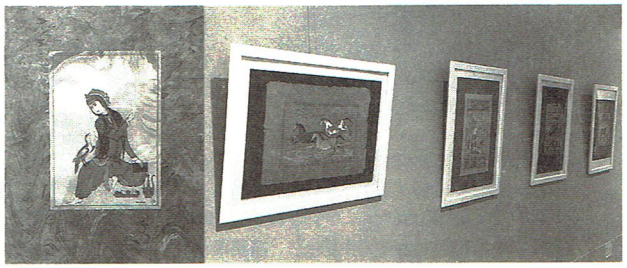
●科学分析による調査

現在、ユネスコとJICAの資金援助でサマルカンド紙の工房が稼働しており、原料は桑の靭皮繊維を用いる。しかし昔の原料については、植物由来、布由来（綿や麻）など諸説あり、不明な点が多い。柴崎さんらは、ウズベクの大学から借りた年代のはっきりしている貴重な紙資料を目視観察と携帯型顕微鏡カメラで撮影、繊維画像をデータベース化し、人工知能を使った判別技術（ディープラーニング）で繊維特性や混入物を分析し、原料の特定や製法の解明を試みてきた。その結果、十二～十五世紀頃の紙はいずれも麻布が原材料と判明し、愛知県芸大非常勤講師の浦野友里さんと共に復元に取り組んだ。

●復元試作

復元紙の試作には、桑、コットン布、麻布の三種の原料を用いた。桑は蒸して皮を剥ぎ、布はできるだけ細かく切り、水に浸し、ソーダ灰で煮熟。桑は木槌や棒で叩解できたが、布原料はホーレンダービーターを十時間以上かけた。サマルカンド紙には簀の目があり、中国の道具で荒い簀の目を出した。いずれも溜め漉きで抄紙し、板や石に貼って乾燥後、米粉、小麦粉、卵白などを塗布、磨き、滲み止めを行なった。材料や技法など試行錯誤しながら、二年半の間に約三十種類の紙を試作。会場には復元したサマルカンド紙にウズベクの学生が模写したミニアチュールの作品が展示された。柴崎教授は「本物に比べるとまだ六十点ほどのできたが、ウズベクの麻を使用したことで、ハリのある、高密度で滑らかな紙ができた」と評価する。

本会議ではこの後、日本側から・海外美術館に残るミニアチュール調査・イスラーム写本の修復の方向性と方法・ディープラーニングの紙質調査の報告、また、中国側からは山東省、安徽省など五省の手漉き紙工房訪問調査の現状報告、韓国側からは貴重な歴史記録「朝鮮王朝実録」の綿密な調査と本の復元報告が行われた。


復元したサマルカンド紙にはミニアチュールの模写を描いて展示

●サマルカンド紙をめぐる文化

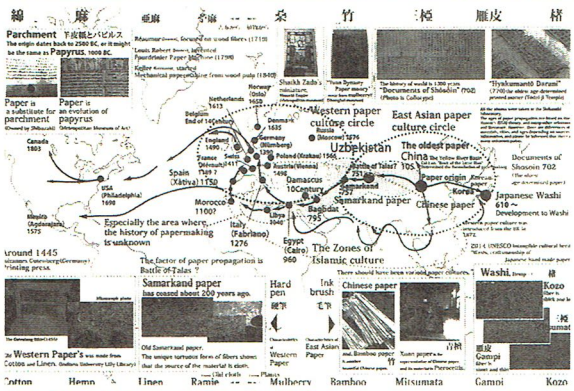
午後の部では、ウズベクの芸術大学、国立図書館、芸術アカデミー、国際イスラーム大学、科学アカデミーなどそうそうたるメンバー八名、ロシアのエルミタージュ美術館から二名の研究者が発表を行った。

サマルカンド紙を理解する上で、欠かせないのは本の文化とそこに描かれたミニアチュールやカリグラフィーである。現在のウズベク地域は、十四世紀後半からのアミール・ティムール時代以降、十五世紀から十六世紀にかけて読書と

美術が盛んになり、多くの優れた科学者や芸術家を輩出した。ウズベクは中央アジアの書籍業の中心であり、本の需要を支えたのがこの地域で作られた紙である。書籍の内容は、コーランをはじめ、歴史的記録や外交・軍事記録、法律、医学、数学、天文学、音楽、文学、芸術など多岐に渡っており、ユニークなものは、全世界の博物館のコレクションになっている。本制作には多くの約束事があり、偶像崇拝禁止のため花模様や幾何学模様があしらわれる。独自のスタイルを確立した、偉大な画家カモルディン・ベグゾットとその一派の美しいミニアチュールは、マチス、ピカソなどの西洋画家達の形や色に関する美的感覚を根本的に変えたと言われている。

●中央アジアの紙を辿る

最近の考古学発掘調査によると、タラス河畔の戦い以前のアラブ侵攻の際にも、紙工房があったという記録が残っている。ティムール朝時代、十五世紀に多くの本が制作されたことから、高品質の紙が求められ、製紙は工芸の最前線であり、紙市場もあった。ティムール朝時代に活躍したカリグラファーは、一五一四年当時の紙について「中国の紙より良い紙はない。しかしサマルカンドの紙はより貴重である。賢い人がその紙に書くと、文章が滑らかで、美しいものになる。良い方を選べ。」とサマルカンドの紙を評している。



世界の紙の伝播とサマルカンド紙（柴崎制作）

当時様々なタイプの紙があり、例えば、スルタンの紙と呼ばれたシルク製の紙は、繊維密度が高く、透明感があり丈夫な紙、清らかで、触った感じがいいと記録されている。十八世紀の貴族支配の時代にも紙の製造は続けられており、当時サマルカンド周辺には四十二の工房があった。一八～一九世紀の始めから、戦争、国内紛争、遊牧民族の侵略のため、サマルカンド紙、ブハラ紙の製造が途絶え、逃げた職人によってコーカンド紙の製造が始まった。コーカンド紙は村の川沿いで作られ、アブリシという紙は強い日差しから目を守るために七色に染色された。染色液にはサフラン（赤色）、インディゴ（青）、銅（水色）、サフランやヘナ（黄色）が利用された。紙を染色液に浸す方法とデンプンに絵の具を入れて後に着色する方法があり、技法は簀の目が残る技法と溶液を注ぎ貯める技法の二種類。乾燥後、小麦粉などが塗布され、貝や動物の角で磨いたとされるが確かではない。コーカンド紙は、二〇世紀初頭、ブハラ首長国の紙幣に利用されたことでも知られている。

会議の様子

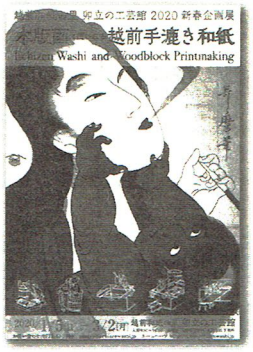
情報欄

●イベント情報

■令和2年　越前和紙祈願祭・漉き初め式
時：令和2年1月5日（日）9:30～
場所：卯立の工芸館

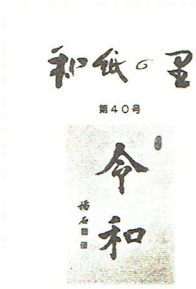
■令和2年　新年賀詞交歓会
時：令和2年1月5日（日）
場所：生涯学習センター今立分館

■「木版画に使われる越前手漉き和紙展」
時：令和2年1月5日（日）～3月2日（月）
場所：卯立の工芸館
※1月中の土日「木版画講座」あり
問合せ：0778-43-7800



■越前和紙展　「ふすま紙を極める」
―越前和紙の職人の技が光るふすま紙の世界
時：2月17日（月）～22日（土）
場所：東京日本橋「小津ギャラリー」
○ギャリートーク
時：令和2年2月22日（土）13:00～14:30
場所：和紙展会場
トーク者：笠井市造（日本襖振興会会長）
長田和也（福井県和紙工業協同組合大紙会会長）

●「和紙の里」40号発行
「和紙の里」40号が発行されました。内容は、岩本町川崎文書でわかる庶民の生活、織豊期印判状・近世から見える大瀧寺焼亡の顛末、テオヤンセンと越前和紙のコラボ、他。
編集：越前和紙を愛する会
発行：2019年11月15日
お問合せ：紙の文化博物館内「越前和紙を愛する会」
tel: 0778-42-0016



■日本の美、平安装飾料紙の世界
―越前が取り組む復元紙とかな表現
書道芸術文化講演会主催
時：2月22日（土）午後
場所：大東文化大学板橋校舎
多目的ホール（東京都板橋区）
参加費：2000円

●web「越前和紙だより」のご案内
facebookページ「越前和紙だより」をご利用ください。「facebook、越前和紙だより」で検索し、「いいね！」をお願いします。
紙媒体「和紙だより」のバックナンバーは、従来通り「https://washidayori.jimdo.com/」より、ダウンロードしてご覧になれます。

編集後記●はるばるウズベキスタンやロシアから来日した方々と、セミナー後のスタディーツアーもご一緒し、越前にも立ち寄りました。それにしても、海に囲まれ、湿潤な気候で、いまだかつて異民族に侵略されたことのない日本と、正反対の国がウズベキスタンだとわかりました。「このような時代に、紙というテーマでこれだけの人が親しく集って、研究成果を分かちあったことは素晴らしい」との彼らの感想が印象的でした。（よ）

季刊・和紙だより 第63号（2020年秋冬号）　発行日：2020年1月6日　和紙だよりURL→http://washidayori.jimdo.com/
発行人：福井県和紙工業協同組合　石川浩　〒915-0234　福井県越前市大滝町11-11　TEL: 0778-43-0875　FAX: 0778-43-1142
編集所：Office YOMOSA　〒520-0025　滋賀県大津市皇子が丘1-6-6 #209　Tel/Fax: 077-523-4172　E-mail: myomosa@mx5.canvas.ne.jp
編集人：右衛門佐美佐子・田中裕子　印刷所：有限会社新進堂印刷所（京都府宇治市）　用紙：竹簀目入り鳥の子紙（石川製紙株式会社製）
※無断での転写・転載はお断りします。